

歴史のまち、羽曳野 1 石器を作った狩人たち

この連載では、今年度から市内各小学校の6年生が、社会科授業や郷土学習で使用する副読本「ふるさと歴史のまち」(市教委委員会作成)をもとに、羽曳野市の歴史をたどります。

はじめての住人

およそ7万年前から1万5千年前まで、長く続く寒冷な気候によって、氷河や氷床が大地を広く覆いました。その結果、地球上のより多くの水分が陸地に蓄えられ、海水が減ったことにより、日本列島は一時的に大陸とほぼ陸続きになることもありました。

その頃、ナウマンゾウやオオツノジカといった大陸育ちの大型の動物が、日本列島にも渡ってきました。それを追って、石を打ち割って作った道具(打製石器)で獲物を捕らえる、旧石器時代の狩人たちが、日本列島に足を踏み入れたのです。

羽曳野市とその周辺では、およそ2万年前に使われた旧石器が、数多くの遺跡で発見されています。羽曳野のはじめの住人にとって、暮らしやすい場所であったことが想像されます。

二上山のサヌカイト

打製石器を作るためには、ガラスのように鋭く割れる硬い石が必要です。近畿地方でよく使われているのは、溶岩が地



表近くで急激に冷やされて固まった時にできる、サヌカイトと呼ばれる安山岩の一種です。そのため、サヌカイトが取れるのは、かつて火山活動があった場所のうちでも、ごく限られることになってはいますが、羽曳野の東にそびえる二上山の山麓一帯は大きな産出地の一つでした。

東は三重県の伊勢市付近、西は兵庫県加古川市付近の遺跡でも、二

上山のサヌカイトで作ったと推定される石器がみつかっています。作りあがった石器として携えていったのか、あるいはまた、石材の状態で運ばれ、そこで石器に仕上げられたのか、どちらにしても、およそ100kmもの距離は遠い道のりです。動物を追って移動生活を送る旧石器人たちは、手持ちの石器や石材が乏しくなると、サヌカイトを補給するために二上山にやってきたのでしょう。その時、二上山の美しい山容は、格好の目印になったはずで

す。羽曳野市周辺にある数多くの旧石器時代の遺跡は、二上山のサヌカイトがもたらす大地の豊かさと狩人たちの足どりを物語っているのです。

(世界遺産登録準備室)

サラダボール

「くすの木千年 さらに今年の 若葉なり」

これは、太宰府の天満宮にある楠の古木を、俳人 荻原 井泉水さんが詠まれた句です。毎年新しく芽をふく若葉が、楠の千年の命をつないできたことに感激をおぼえます。

普段、私たちは自分の力だけで生きているような錯覚をしがちですが、家族や友だちなど周囲の人々のおかげで生かされています。今ここにある命も親から生まれたことによりつなげた命ですし、何か困った時、悩んだ時には周囲の人からの励ましや配慮に救われることがあります。人は日頃関わりをもつ多くの人々との支え合いがなければ一日たりとも生きることができません。このことは、単に人がから生まれてくるというだけでなく、この世には誰一人として不必要な人

どいないということです。そして一人ひとりの人権は、社会を作っていく上でも尊重される大切なものではないでしょうか。

毎年芽吹く若葉が、太陽や雨のめぐみを枝や幹や根に伝え、千年の命をつないだ楠のごとく、私たち一人ひとりもこの若葉のように社会の一員として大切な役割を担っています。そしてよく見ると、木々の若葉は一枚一枚が日の光や雨を受けやすいように、互いに少しづつ譲り合い、重ならないようになっていきます。大きな木を長きにわたって支えつづけることができたのも、このように一枚一枚の葉が自分の役割を全うし、周りとの調和をはかった賜物だといえるのではないのでしょうか。このように自然の美しい姿からは、多

くの学びがあります。

この大切な学びを教えてくれる大自然を大切にしようというのが「環境月間」です。国連では日本の提案を受けて6月5日を「世界環境デー」と定めています。命の源である海や川や池を汚すのは、私たち人間が流す生活廃水です。他の動物たちは決して自然を壊すことはしません。大自然を守るということは、私たち人間を含め、生きとし生けるものの命を守るといえるのです。

梅雨の晴れ間に、新緑の輝きがまぶしい季節です。今一度、一人ひとりの命の尊さと自分ができる役割について考える機会をもちましょう。

(人権推進課)